

写真で振り返る

日出の風景と辻間楽

COLUMN

- コラム -

第 3 話

江戸時代の「楽」

1 同じ神事を行う八津島神社と若宮八幡社

天徳 4(960) 年創建と伝わる日出若宮八幡神社(以下、「若宮八幡社」と略。)は、八津島神社の神と山城国石清水八幡宮の神を勧請、合祀することによって誕生しました。

そのため、若宮八幡社では八津島神社の神事をそのまま取り入れて、自らの社の神事として採用しました。そのことは江戸時代後期に二宮兼善によって編纂された「日出図跡考」に「津嶋宮、日出八幡宮共に御神事の時分、社人より小役人に至る迄同様の御神事也。津嶋宮より日出八幡宮は御分神の譚を以てなり。」と記されています。

明治 18(1885) 年 11 月に作成された「日出若宮八幡神社御由緒」には若宮八幡社は仁王村・川崎村・内野村の産土神として祀られてきたことが記されており、江戸時代以前の若宮八幡社の信仰圏は日出・川崎にとどまるものでした。

2 日出藩の鎮守神として再興した若宮八幡社とその神事

文禄 3(1594) 年、キリスト教徒であった毛利重政は代官として日出に赴いた際に自分の信仰に適さない神として若宮八幡社を破却しました。城内忠一郎氏がまとめた『改稿津島年譜』には当時の若宮八幡社の神主もキリスト教徒であった可能性を指摘しており、若宮八幡社の破却はキリスト教信仰が広まっていく中で起こった出来事であった可能性が考えられます。

破却された若宮八幡社を復興したのが、初代藩主木下延俊でした。慶長 6(1601) 年に入部した延俊は、翌年には若宮八幡社を日出藩の鎮守と定め、荒廃していた社殿を再建しました。そして、慶長 17(1612) 年には「豊後国速見郡日出庄若宮八幡宮御祭礼次第」を作成して、若宮八幡社における祭礼の規式(やり方)を定めました。

3 重要視された「楽」

この慶長 17 年に定めた若宮八幡社祭礼の規式の中で、「楽」が神事の中に登場するようになります。

「日出図跡考」には、慶長 8 年や慶長 12 年には楽の奉納がすでに始まっていたとする説が紹介されていま

す。二宮兼善はこれらの説には疑義を呈していますが、日出藩の治世の初期から「楽」の奉納が始まっていた可能性がうかがえます。

慶長 17 年以降、若宮八幡社の大祭では日出藩主隣席のもとで楽が奉納されるようになりました。例えば、『木下延俊日記』の慶長 18(1613) 年 9 月 15 日条には、若宮八幡社の大祭を見学した木下延俊は、自ら楽や鼓を演奏した様子が記されています。

また、日出藩第 11 代藩主が遺した「木下俊懋日記」や明治期の「日出若宮八幡神社御由緒」には、江戸時代後期では領内の村々が年ごとに交代して楽を奉納したことや楽を奉納した村には年貢が減免されたことなどが記されています。

中世から初代藩主木下延俊の頃は、八津島神社から若宮八幡社へ楽打ち達を派遣して楽を奉納していたとされています。しかし、俊懋が藩主であった江戸時代後期には、領内の村々が藩の鎮守神である若宮八幡社に対して直接、輪番で楽を奉納する体制に変化していったことがわかるのです。

このように、現在でも若宮八幡神社で奉納される辻間楽は、江戸時代には藩を挙げて演じられていた歴史的にもとても価値のある伝統芸能であると言えるのではないのでしょうか。

「木下俊懋日記」寛政十二(一八〇〇)年九月十五日条(当館蔵)
この年に若宮八幡宮に楽を奉納したのは、山香郷の目州村・
日差(日指)村・久木野尾村。

